



岡村健司 編／武藤功哉 梅村元史 他著

『国際金融危機と IMF』

財団法人大蔵財務協会 2009 年
定価 1,800 円 (税込)

評者

慶應義塾大学大学院商学研究科 教授

柏木 茂雄



待望の書である。

G20 首脳会議をはじめ最近の国際会議は一樣に世界経済の安定のため国際通貨基金 (IMF) が果たすべき役割が大きいと謳い上げている。数年前にはその存在意義さえ疑問視された状況に比べると様変わりである。明らかに皆の関心が高まっている。ところがその IMF について詳しく知っている人は意外に少ない。本来、我が国は IMF に対してもっと理解を示し積極的に引っ張っていく姿勢があっても良い筈だが、どこか遠い存在のように扱われているのが現状である。その観点から、IMF の歴史・現状・課題・改革の方向性について平易な言葉での解説を試みた本書のタイムリーな出版を大いに喜び歓迎したい。

IMF が一般の人にとって身近な存在でないことにはいくつかの要因がありそうだ。

まず、IMF は実に分かりにくい機関である。これは「国際金融」あるいは「国際通貨制度」という抽象的なテーマを扱っているからだけでなく、IMF が国際的な妥協の産物として誕生したという由来に起因している面もある。本書「はしがき」の冒頭において玉木財務官が触れている通り、IMF は米国代表のホワイトと英国代表のケインズが激論を戦わせ最終的には 1944 年 7 月に米国ブレトンウッズにおいて合意が成立して誕生した国際機関である (両者の

考えの違いについては本書第 2 章を参照)。ホワイトとケインズそれぞれの考えはいまだに IMF の中に脈々と流れており、両者の胸像は現在でも議長席後方から日々 IMF 理事会の場で繰り返される妥協形成の様子を (時には温かく時には苦々しく) 見守っている。

誕生後の IMF も各国間の話し合いを繰り返して制度的枠組みを作り上げていった。見習うべき前例もなく、教科書もなく、各国の意見のぶつかり合いを経て、言わば人類の知恵と妥協によって出来上がったのが今日の IMF の姿である。このため極めて難解な概念に溢れている。例えば、IMF による「融資」は正式には「融資」ではなく「通貨の購入」であって、「返済」は正式には「買い戻し」と言われている。また、SDR (特別引出権) は、「国際通貨」ではないが既存の準備資産を補完するための「資産」であると言われてすぐに理解できる人は少ない。必要に迫られこれらの概念を頭で構想して作り上げた先輩達の苦勞には頭が下がるものの、この複雑さが IMF を取っ付きにくいものにして (因みに、これらの概念は本書第 5 章及び第 8 章で丁寧に解説されている)。

また、IMF を分かりにくくしている要因として創設後 60 年以上にわたって常に時代とともに変化してきた点もあげられる。そもそも、米ドルを中心とした固定相場制度を守るために設立された国際金融機関が、主要国通貨がフ

ロート制に移行した今日において果たすべき役割は何か？民間金融市場が発達していない時期に創設されたIMFの融資制度が今日において有用性を発揮するためにはどのような制度が必要なのか？伝統的な財政金融政策がマクロ政策の中心にあった時代に比べ金融セクター政策の重要性が高まった今日においてIMFの政策助言はどのように変化すべきなのか？IMFはこれらの問題に日々真剣に取り組み、それに対処するため数々の制度改革を実施してきた。しかし、これらの改革は往々にして制度的に継ぎ足しの連続であり、結果的に現状では極めて複雑怪奇で分かりづらい制度が出来上がっている（この点も本書の随所で分かりやすく解説されている）。

一方、IMFが時代の変化に追い付いていない面もある。その代表例がクォータ改革であり、加盟国の発言権が基本的には当該国の世界経済に占めるシェアを反映すべきでありながら現実にはそうになっていないという問題である。この議論の主たる受益者は中国やインドのような新興国であって我が国にとって関係の薄い問題であると取る向きもあるが、そのような見方は間違っている。我が国はIMF加盟後、一国の発言権はその国の経済力を反映させるべしという点を一貫して強く主張し続け、自らのシェアを拡大してきており、今日この議論を積極的に推進していく責務がある（この問題については本書第9章で詳述されている）。

より広い観点から、戦後の我が国経済はIMFを中心とした安定的な国際通貨体制の最大の受益者であるという視点も忘れてはならない。今日、IMF第2位の出資国である我が国は、IMFが世界的課題に適切に対処していくうえで主導的な役割を果たすことが求められているにもかかわらず、これまで国内においてIMF

に関する情報は極めて不十分なまま推移している。IMFについて平易にしかも最新情勢まで含めて解説した書物はこれまで極めて少なかったと言える。類書は往々にして現実の動きに追いついていないか、あるいはIMFに対して不必要に批判的であり、IMFとは何かを客観的・中立的に分かりやすい形で伝えていなかったように思える。この点で本書は直近のIMF改革までカバーしているだけでなく、各種資料も充実しており極めて価値が高いと言える。

著者は「IMFが加盟国にとって真に頼りになる機関であり続けるためには、IMFが直面する多様な課題について加盟国間での真剣な議論により、現実的な解答を見出していくことが重要」という熱い思いで本書を結んでいる。評者は、我が国がこのような国際的な議論を積極的・建設的にリードすることを期待しており、そのためにはまず国内でこれらの問題についての活発な意見交換が必要であると確信している。IMFの問題は財務省国際局の一部に任せておけば良いのではなく、IMFについての理解者のすそ野を国内で広げ、議論を活性化し、IMFに関する知見を醸成することが求められている。その面で本書が大いに貢献することを強く期待している。

最後に、国際経済、国際金融に興味を持つ人にとってIMFは大変魅力ある職場であるものの国内的にあまり知られていないのが残念である。国際的な場で活躍できる実力を持ちながら身近な存在として認識されていないために職場としてのIMFを念頭に浮かべる人が少ないためであろう。評者はより多くの日本人がこのような職場で活躍することを願っており、そのためにも本書のような解説書が国内で広く読まれることを望むものである。